

感謝にかえて（有識者からのコメント）

木村 玲欧（富士常葉大学環境防災学部 准教授）

牧 紀男（京都大学防災研究所巨大災害研究センター 准教授）

田村 圭子（新潟大学危機管理室 教授）

瀬渡 章子（奈良女子大学生生活環境学部 教授）

林 春男（京都大学防災研究所巨大災害研究センター長・教授）

小出 治（東京大学工学部都市工学科 教授）

（中川） 次に有識者の先生方からコメントいただきます。まずは富士常葉大学の木村先生です。

（木村） 木村です。本日はお疲れさまでした。

次第ですと上からずっと有識者の名前が並んでいるのですが、立派な先生が先に立派なことをおっしゃると私はもう何も言うことがなくなってしまうので、有識者は下の方にある名前順に話をしていくということでトップバッターを仰せつかりました。

今日は司会をさせていただいて、つたない司会にもかかわらずきちんと支援者の方は 1 分以内に、皆さんは 10 分前後でご発表いただきました。ありがとうございます。聞いていただいた方でこういう感想をお持ちの方がおられると思うのですが、非常に資料が読みやすい、見やすい、整理されているというものです。このように 10 団体も発表しますと、資料のフォーマットがぐちゃぐちゃで、何だか分からないうちに終わってしまうというのが多いパターンかなと思います。しかし本日は、ある土台を基に皆さんが話を展開されているので、非常に理解しやすく、発表者も話しをしやすく、また内容については今後の参考になることが多々あったのではないかと思います。

初の試みということで、アドバイザーの方々には今回試行錯誤の中で協力いただきました。今後もこういう指導案を作りながら、より外に広めていく活動をしていきますので、今後とも協力をよろしく願いいたします（拍手）。

（中川） 京都大学の牧先生です。

（牧） 私は見かけより若く、この順番で発表でございます。今日は本当に皆さんのいろ

いろなお話を聞かせていただき、ありがとうございます。

私の専門は都市計画や建築なのですが、今日はまちの運営の方法を教えていただいたような気がいたします。ニュータウンというのは人工的に新しく創り出されたまちです。今日お話しいただいた方々が第1世代で、私もニュータウン育ちですが、私の世代が子供としての第一世代です。しかしながら、まだ、ニュータウンはまだ世代が一回転しておらず、次にどうなっていくのかというのがよく分からないという状態にあります。今日お話しいただいた方は、第一世代の方々に、定年になって、まちの為に働き初められた方々だと思っています。まず、まちに帰ってきた気になったのが「安全」の事で、地域の安全を守るために活動されておられるのだと思います。

今日は同時にすごく長い歴史を持つ「出雲」のお話をお伺いしました。何となく外から見ると自然にできているように見えるのですが、中ではいろいろなことがあると思いますし、長い歴史のなかで形づくられたものなのだと思います。まちに対する「責任感」のようなものを出雲のお話から感じました。

出雲のような取り組みがニュータウンでも同じようにされるようになってきています。これは、まちの成熟のプロセスなのだと非常に感銘を受けました。唯一気掛かりなのは、出雲もそうだと思いますが、ニュータウンもさびれていく、高齢化していくということです。本日は、本当にいろいろなことを教えていただき、ありがとうございます。今後ともぜひ協力させていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。今日はお疲れさまでした（拍手）。

（中川） 新潟大学、田村先生です。

（田村） 新潟大の田村でございます。今日はどうもありがとうございました。

地域の第一線で活躍されている皆さまと接するにつけ、話をお聞きしていると、防災や防犯は地域の解けない課題をパズルのように考えながら、解こう、解こうと皆さんが日々いろいろ活動されているということが非常によく分かりました。

皆さんの話をお聞きしていると、すごくその中に課題を解こうとするあがきの中からたくさんのコツ、ポイントやヒントが実は満載だと思うのです。今日のご発表は割と大きな視点からお話しいただいたので、もしかすると全国の自治会、自主防犯の方たちが知りたい秘密がいっぱい詰まっていると思います。

今回は私どもで提案させていただいた指導案がどれぐらい皆さんのその秘密、知恵、コツ、ポイントを吸収できて発信できるかは今後にかかっているのだと思いますが、皆さんが今回、自分たちのやってきたことを出し惜しみせずに公開していただいたことに非常に感銘を受けると同時に感謝したいと思います。この知恵を何とか皆さまと一緒に磨きながら全国に発信して、新潟の者がこんなことを言うのも何ですが、奈良発ということで全国にアピールしていけるものが一緒に作れればと思っていますので、引き続きよろしく願いいたします。今日はありがとうございました（拍手）。

（中川） 奈良女子大学、瀬渡先生です。お願いいたします。

（瀬渡） 今日は本当にたくさんのご報告を聞かせていただき、私も大変勉強させていただきました。日頃防犯活動を研究のテーマにしている、奈良以外のところに目が向いていたのですが、実は奈良でもこんなに素晴らしい活動をたくさんしておられるのだということで、今日は灯台下暗しの自分を感じました。このような活動を具体的に知りたいという方はたくさんおられると思いますので、ぜひ、奈良の活動の実績を全国に発信していただきたいと思います。

あまり時間もありませんので、一つ二つのポイントについて話をさせていただきます。

一つは、グループで活動されていて、シンボルマークを作っておられるとか、「ウィズ作戦」という何かをしながら防犯の活動をしましょうといったキャッチフレーズなどを作り出しておられて非常にいいなと思いました。そのことが活動の特徴を考えることにつながっていると思います。

もう1点は、成果が見える活動が大事ではないかと思いました。発表の中でグラフを作っておられて、参加数が伸びていることがよくわかりました。活動をやっていく中で成果がどのように出ているかということグラフ、あるいは地図に表現する、そのすると活動も積み上がっていることが見えやすくなるということを教えていただきました。

もう一つは「継続」がそれぞれのグループの課題になっているということです。

いろいろな活動の発表を聞かせていただいて、活動のきっかけ、すなわち「入り口」は防犯・防災ですが、アウトプットといいますか、「出口」「成果」は地域ごとの多彩な活動となっていて、防犯・防災は総合的なまちづくりであることが実感されました。

これからもますますご活躍いただきたいと思います。ありがとうございました（拍手）。

(中川) 京都大学の林先生です。よろしくお願いいたします。

(林) 10月から皆さん本当にご苦労さまでございます。大変立派な成果だと思います。それぞれの団体が五つずつ、全部で50の活動プランにいただいたことも大変ありがたいと思います。

その中で皆さんの「一押し」を今日お話しいただきましたが、十分本になると思います。ですから、これから倉田さんに頑張ってもらって、出版社へ企画書を出しますので、来年度は出版を目指して全国デビューに行きたいと思っています。

そこでは多分、何か最初に少し全体の枠組みのようなことを書かなければいけないはず。そういう意味では、今日は皆さんから10本の発表を聞かせていただいて、安心・安全まちづくり推進課は、これからの日本にとっても重要な試みだということは証明できたといえます。つまり、地域の中にいるリーダーの皆さんは、防犯だけやっている、防災だけやっているというわけではありません。皆さんが住んでおられる地域が安全かつ安心なものになるように、いろいろな形で日々ご努力いただいています。

しかも、そういう人材はなかなか得難い。ある意味で一人から始めなければいけない、そこにだんだん磁石に引き付けられてくるように、時間をかけていい人材が集まってくる、そういうプロセスがよく分かったのではないかと思います。その過程で、たくさんの出会いもあるということだろうと思います。

それから、防犯と防災というのは、役所では係が違うのですが、リーダーの皆さんの中では同一である。その二つがどう絡み合うかということも今日はよく教えていただいたのだと思います。四つあった防犯のご発表のうち、二つは言ってみれば地域の防犯パトロール、もう二つは子どもを守ろうという形での試みでしたが、期せずして最後に皆さんは「継続は力なり」、続けることの大事さをお話しいただきました。その意味では無理をしないというのが大変重要で、日々の無理しない少しの努力で、「ウィズ作戦」でもいいわけですね。ながらでできる、ついででできる、そういうものの中で少しずつ培っていくというのが大変重要だと教えていただきました。

逆に、六つありました防災は、ある意味ではすべてイベント、「ハレとケ」で言えば「ハレ」の話になるわけです。たくさんの手間と暇をかけて1年に1回、あるいは何年かに1回、あるいは年に何回という限られた、あるいはアンケートで言えば1回限りになってし

まうかもしれません、そういうものをみんなで手間暇かけて作る。自主防災会として役所主導で作られたところが悩んでいるのは、何をしたいか分からない。それがこういうことをしたらいいのではないか、こんなふうにやれるというイベントに向けてたくさんの手間暇をかけることが地域の活動になることを教えていただきました。

みんなが同じ方向を向いて歩いていくことが一番重要だと思いますが、それが日々の活動でもできるし、何かイベントに向けてやることでできるというので、防犯と防災がどう絡んでいけばいいのかというのも具体像がすごく見えました。

そこで何をつくろうとしているかとすれば、一つは人と人とのつながりをつくっていく。もう一つは、その人々を結び付けるようなシンボル、シンボルマークもそうなのですが、お祭りや本当の意味のイベントなど、そういう何か地域の連携の核になるようなものをつくる。そういうことを10団体のうち9団体の皆さんは目指しているのだらうと思うのです。

そうした活動が行き着いた先がどうなるかという、出雲なのだらうと思います。先ほど、人と人とのつながりはどこまで信じていいか分からないとおっしゃいましたが、みんなやることは分かっている。守るべき伝統もある。子々孫々へ伝えるべきものもクリアにある。それをどう続けていくかというときに、普通では絶対に言えない言葉なのですが、「できるだけ金も仕事も増やさずにやる」のだということ、これが究極だと思うのです。

そういう意味で、奈良でこのプロジェクトを始めたというのは大変意義が大きいのではないかと。今年は遷都1300年で、その前の藤原京も含めて一番歴史がある中で、継続性があります。かつ、僕はこのプロジェクトで本当にびっくりしましたが、十のうちの九つが普通の言い方をすれば新興住宅地の中での人間関係づくり、コミュニケーションという問題を一生懸命努力されているわけですから、そういう意味での新しさ、両方を持っています。ほかの地方は大体どちらかしかないわけです。けれども、両方が鏡の裏表で見えているというところが大変重要なのではないかと思います。

この1年のご努力に深く敬意を表したいと思います。ただ、これで終わりではなくて、皆さん、ご発表の中でもいろいろな課題も見えたし、これから先の方向が見えたと言っていたので、またぜひご精進をしていただけたら、これも継続は力ですので、継続ということで頑張ってくださいと思います。

もう一つは、ぜひ奈良にとどまらず全国に打って出ようということです。そういう意味で参考資料というのが妙にそれだけ白い資料があったと思いますが、いろいろな外部資金の情報を奈良県がまとめてくれました。最初に西大和6自治会連絡会には防災教育チャレ

ンジプランに応募して、無事に通っていただきましたので、これから1年間、外へ行っていろいろ情報発信をしていただくこととなりますが、安心・安全なコミュニティをつくるというノウハウは学校では教えてくれないことですので、皆さんが本当の意味での先達ということで、ぜひいろいろな地域でこれをお披露目いただくようお願いをして、コメントに代えさせていただきますと思います。

どうも本当にご苦労さまでございます（拍手）。

（中川） 東京大学小出先生、よろしく願いいたします。

（小出） 林先生が全部総括したので何も言うことがないです。本日の活動報告の立派さに驚いています。関西の人は防犯・防災のボランティア活動は全く何もやっていないのではないかと思っていたのですが、非常に立派な活動をされていて、多分、来年が最後になるかもしれませんが、総理大臣賞に奈良県警からプッシュしていただいて、立派な団体がありますのでノミネートしていただきたいと思います。

全国展開していき全国に知らせてゆく貴重な観点がたくさんあるような気がします。人の輪が徐々につながっていく、それは学校への仕掛けであるかもしれないし、自主的な学校の活動でもあるかもしれない。特に子どもをキーワードにして、地域がつながっていくという話が非常に感激的に伝わってきます。シンポジウムのパネリストが語った言葉で非常に感激的なのは、子どもを語ることは社会を語り、希望を語り、地域の未来を語ることで、まさにこういうことなのだと思います。防犯・防災の一体的な活動をどうすればいいのか実際には良く分からないというところで、一つの答えを出していただいたということだと思うのです。

子どもの安全を守っていくということが社会を語っていくことになるし、自分たちの希望を語っていくことになる。そして、それは地域の未来を語っていくことですし、ひょっとしたら日本の国を語ることになるかもしれない。そういう広い目的を見つけることです。また、継続するため、力を抜いてみんなでやっただけには、一番重要なのは創意工夫、アイデアであることが示されました。

では、そのアイデアをどうやって出してくるかという、自分たちの地域に根ざした愛情から、地域を良くしたい、子どもたちを守りたいという気持ちが自分たちのお金のない現状の中で自分たちの知恵、その知恵と人材しかないのだとおっしゃっていましたが、ま

さにそこがキーになっていくと思います。それが枯渇してしまったらこういう活動は成り立たないのです。お金もなければ何もない状況の中で「頑張ってくれ」と言われて、その頑張る気持ちとは一体何かというと、自分たちの子どもを守りたい、地域を良くしたい、自分たちのコミュニティーを再生したいという気持ちがあるから、こういうアイデアとなって、しかも、自分たちのボランティア活動は損をするばかりですよ。自賠責で払って、自分で車を運転してぶつける、それも全部自分の責任になってしまう。その場でそれで守ったことに対して直接的な報酬は何もないという世界の中で地域をつくっていかねばいけない。そんな支えとは一体何だろうということです。

その一番端的な言葉はやはり安全・安心。それを分解していくと、防犯・防災という現実の中ではいろいろな葛藤があって、お互いの縄張り争いがあるって、どうやっていいのか分からない現状もありますが、それに対して非常にいい答えを今日は出していただいたと思います。

そういう意味で、ぜひ全国展開をして、全国の皆さんも同じように、どうして継続したらいいのか、お金がない中でどうやってみんなを集めたらいいのかと悩んでいます。それに対して立派な答えが出てきたのではないかと思います。また来年も期待していますので、よろしくお願いします。どうもありがとうございました（拍手）。